

ちりめん本「日本昔噺」シリーズの初版本について ①

佐藤寿洋

「ちりめん本」とは周知のとおり、明治の出版人、長谷川武次郎（1853-1938?）により出版された、クレープ状に細かく皺を寄せた和紙からなる絵入りの和装本であります。多くが日本昔噺を題材にし、英語、独語、仏語などの欧文で著されました。当初は小学校の教科書や、外国語習得を目的としたテキストとして出版されたようですが、その後、外国人向けの日本土産や、海外出版社との提携による輸出品として相当部数刷られたようです。そのことから、長谷川武次郎は日本の文化を海外へ発信した先駆的な出版人として評価されています。

さて、長谷川武次郎が出版したちりめん本の嚆矢に、英語版「日本昔噺」シリーズ（Japanese Fairy Tale Series）があります。『桃太郎』（No.1）、『舌切雀』（No.2）、『猿蟹合戦』（No.3）など誰もが知るタイトルから、『大江山』（No.19）、『養老の瀧』（No.20）など、日本文学、児童文学に関心のある人でないとわからないタイトルまで全20巻（21冊）で、それぞれにはシリーズ番号が付されています。（『鉢かづき』（No.16）と『文福茶釜』（No.16'）は同番号が使われています）このシリーズは70年間に何度も版を重ね、時には挿絵も変更されるなど、多様な版が生み出されました。その全容はわからないことが多く、特に初版本については、書誌情報の信頼性が乏しいがゆえ、特定には困難を伴います。また、教科書・教材用に出版された縮刷加工されていない平紙本や茶表紙本などの廉価版との関連性も十分には分かっておりません。廉価版もちりめん加工された版と同じ版木で刷られた可能性が高く、版を考える際は、平紙本、茶表紙本も含めるのが望ましいようにも思います。

初版本を識別する際、初めに確認するポイントは刊行年です。各タイトルの奥付には出版年がほぼ掲載されています。（No.16'の『文福茶釜』のみ奥付がありませんが、一部の版には最終頁のイラストに書誌情報が掲載されています）それぞれのタイトルで最も古い刊行年の表記は右記となります。版表記については、掲載されているものもあります。再版、十五版、十六版、十七版、十八版の5つのみで、その他の版表記があるタイトルを未だ見たことがありません。自ずと初版本は右記刊行年で版表記のないもの

に絞ることができます。

- No.1～6 明治18年出版（桃太郎、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺、勝々山、鼠の嫁入り）
- No.7～11 明治19年出版（瘤取、浦嶋、八頭の大蛇、松山鏡、因幡の白兔）
- No.12～16 明治20年出版（野千の手柄、海月、玉ノ井、俵藤太、鉢かづき）
- No.16' 明治29年出版（文福茶釜）
- No.17 明治21年出版（竹篋太郎）
- No.18 明治22年出版（羅生門）
- No.19 明治24年出版（大江山）
- No.20 明治25年出版（養老の瀧）

しかし、刊行年と版表記だけで初版本を特定することはできません。刊行年の表記そのものの信憑性が疑われる場合があるからです。それは刊行年が、奥付に記された出版地である長谷川武次郎（弘文社）の住所の年代と合わないものが出てくるからです。例えば、刊行年が明治18年と表記されていても、出版地が本村町（明治35年から明治44年）であれば、表記された刊行年が信用できないものとなります。そこで、次に初版本を見分けるポイントとして、初版本の刊行年と武次郎の住所の年代が合っていることが重要となってきます。

長谷川武次郎の住所の変遷

京橋区南佐柄木町	明治18年から明治22年
京橋区丸屋町	明治22年から明治23年
京橋区日吉町	明治23年から明治34年
四谷区本村町	明治35年から明治44年
下谷区上根岸町	明治44年以降

ここまできて初版本の特定が進んできましたが、実はまだ見分ける条件が必要となります。次回の紙面でそれらのことを書くことができれば幸いです。

参考：石沢小枝子 ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本 / 東京：三弥井書店
齋藤祐佳里 ちりめん本「日本昔噺」シリーズの版に関する研究

さとう としひろ（極東書店 営業部）